

第6学年2組 社会科学学習指導案

単元名 「明治の新しい国づくり」

指導者 奈良 諒

対象：6年2組25名 日時：令和7年11月15日(土)12時30分～13時45分 場所：第3多目的教室

I 教材について

1853年、海禁政策（鎖国）を敷いていた当時の日本（浦賀）に、アメリカから渡ってきた4隻の軍艦が現れる。艦隊を率いていた東インド艦隊司令長官マシュー・カルブレイス・ペリーの目的は、アメリカ大統領ミラード・フィルモアの国書を日本（江戸幕府将軍）に届けることであった。国書の主な内容は、難破したアメリカ船の乗員を保護すること（人命救助）、アメリカ船に食料や水、石炭を与えること（薪水給与）、貿易を行うこと（通商）である。幕府は、朝廷に報告した上で、どのように対応すべきか各藩からも意見を集めた上で、翌年の1854年に日米和親条約を結んだ。その後、幕府は1858年にも日米修好通商条約を結ぶ。この2つの条約をもって、日本の海禁政策（鎖国）は終わりを迎えたとされている。

この歴史的事象（日米和親条約締結）は、長らく歪んだ理解（誤解）のもとで通説とされてきた。主に、①幕府が無能無策であった、②黒船艦隊の軍事力に屈した、③日米和親条約は極端に不平等であった、の3点である。しかし、①の幕府無能無策説は、条約改正を一大政治課題に掲げる明治政府が、その正当性を補強するために主張してきたものであり、当時の幕府は黒船来航の情報を事前に得ており、その準備も怠っていたわけではない。②黒船艦隊の軍事的圧力説だが、ペリーは大統領から発砲厳禁の至上命令を受けており、砲艦外交に走ることはできなかった。軍艦が発砲した事実はあるが、その目的は「時報」「ペリーが日本上陸へ向けて出発する合図」などであった。また、③の和親条約不平等説だが、当時の日本は外国船打払令（1825年発令）を緩和した薪水給与令（1842年発令）のもと、すでに人命救助や食料・燃料の提供を行っており、通商に関しては最後まで合意しないまま条約締結をしていることから、アメリカ側の要求を全て呑んでいたわけではないことが分かる。すなわち、極端に不平等な内容であったとは言えないのが実際のところである。

本時においては、通史とされてきた黒船来航に関する情報と提示された資料から得られる情報を比較することで、歴史的事象を異なる立場や視点から吟味したり捉え直したりすることが予想される。また、本時の活動を通過点として、この後、発足する明治政府がどのような意図、目的をもって政治を行うのか、それによる日本社会への影響や、その変化を様々な立場から捉えられるようにしていきたい。

II 子どもについて

本学級の児童は、社会的・歴史的事象にふれたことによって生まれた問題意識や問い、疑問を学習問題に設定して学習に取り組んできた。児童は予想や見通しをもったり、学習内容や学習方法を吟味したりしながら、学習問題の追究、解決を行ってきた。また、単元の構成の中では、獲得した知識をもとに「自分であればどうするか」「為政者による政治のよい、悪い点はどこか」などといった、知識を再構築（表現）できる場を設定するようにしてきた。しかし、学習を通して獲得した情報を、様々な立場や視点から捉え直したり、比較、分類、関連付けたりする際、情報を多角的に考察する力には個人差がある。

III 校内研究との関わりと目指す子どもの姿

四校園の研究テーマ	「自ら考え、自律的に行動する子の育成」
附属小研究主題	「多様性を生かした学びの環境づくり ～共に学びの主体者に～」
社会科部研究主題	「主体的に学習問題を追究しながら、獲得した情報を多角的に考察し、社会と自分をつなげようとする子」

校内研究の関わりとしては、単元を通して、児童の問いが解決されるような学習展開にしていきたい。単元の初めに江戸時代から明治時代にかけて様々な変化が起きたことを捉えさせ、そこから生まれる「なぜだろう」「調べてみたい」といった疑問や意欲を学習問題に設定する。自ら考えた問いを、時には友達と協力しながら解決していくという自律的な学習に繋げていきたい。

本時では、自分なりの問いをもちながら、黒船来航、交渉の様子、条約内容などに関する情報を、様々な資料から見つけ出し、それらを比較することを通して、通史とされてきた史実を捉え直せるようにする。それによって、固定認識に囚われることなく、様々な立場や視点に立って情報を獲得したり、多角的に情報を考察したりできるような力や態度を身に付けられるようにしたい。

IV 単元について

(1) 単元の目標

黒船の来航、廃藩置県や四民平等などの明治政府の改革、文明開化などに着目して、図や地図、年表などの資料で調べ、まとめ、このころの政治の仕組みや世の中の様子をとらえ、その変化を考え、表現することを通して、我が国が明治維新を機に欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めたことを理解することができる。

(2) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ペリーの来航や新政府が進めた新しい国づくりについて調べることを通して、我が国が開国し、江戸幕府が倒れるきっかけとなったことや、欧米の文化を取り入れ近代化が進んだこと、欧米諸国と対等な関係を構築しようとしたことを理解している。	幕末から明治維新につながる世の中の学習や新政府が進めた新しい国づくりの学習を通して、歴史事象を具体的に調べ、それらの時代の人々の働きを考える力、調べたことや考えたことを表現している。	幕末から明治維新につながる世の中の動きや新政府が進めた新しい国づくりに関心をもち、政治や社会の仕組みの変化などを意欲的に調べようとしている。

(3) 単元の指導計画及び評価の計画（全8時間）

時間	○主な学習活動	◆教師の支援	・主な評価規準
1	○江戸時代から明治時代にかけて起こった様々な変化を、資料を比較して捉える。 単元の学習問題 明治時代になり、社会は何がきっかけ、理由、原因となり、どのように変化したのだろうか。	◆提示した資料から変化を捉えさせ、児童が考えた問いを集約する。	・幕末から明治維新につながる社会の変化を捉え、関心をもち、自ら問いを設定しようとしている。 【主】（記述・発言・観察）
2 本時	○ペリー来航から日米和親条約締結までの経緯を調べる。 ○自身が調べた内容と提示された資料から読み取った情報を比較する。	◆教科書や視聴覚教材などから、通史とされてきた条約締結までの経緯をおさえさせる。 ◆提示した資料をもとに、条約締結に対する新たな視点に気付かせる。	・黒船来航時の様子や江戸幕府の対応などを新たな視点で捉えたり、条約締結について文章に表したりしている。 【思】（記述・発言）
3	○日米修好通商条約の内容をもと	◆江戸幕府が行った公議を児童に	・自分が藩（大名）の立場で

	に、条約に対する自身の考えをまとめる。	体験させ、条約に対する自身の考えを深めさせる。	あれば、条約締結について幕府にどのように進言するか文章に表している。 【思】（記述・発言）
4	○開国後の世の中の状況や人々の生活、江戸幕府が政権を天皇に返す経緯について調べる。	◆飢饉や開国後の貿易の影響と人々の生活への関連、影響を捉えさせる。	・飢饉や開国後の貿易などから生まれた幕府への不満が倒幕につながったことを文章に表している。 【知】（記述・発言）
5	○明治政府が行った政策（版籍奉還、廃藩置県、身分制廃止など）について調べ、そのねらいについて考える。	◆様々な政策とその目的を、天皇中心の国づくりの面から捉えさせる。	・明治政府が行った政策について、藩や身分制度を廃止した天皇中心の国づくりと結び付けて、文章に表している。 【思】（記述・発言）
6	○明治政府が行った政策（徴兵令、地租改正、殖産興業など）について調べ、そのねらいについて考える。	◆様々な政策とその目的を、軍事強化、税収安定、経済発展の面から捉えさせる。	・明治政府が行った政策について、欧米の国々に対抗する国をつくること（富国強兵）と結び付けて、文章に表している。 【思】（記述・発言）
7	○資料をもとに、文明開化による人々のくらしの変化を調べる。	◆江戸時代と明治時代の町並みや人々の様子などを比較させる。	・町並みや制度、衣食住などが近代化・欧米化へと変化していること（文明開化）を捉えている。 【知】（記述・発言）
8	○学習したことをもとに、明治維新による社会の変化をまとめる。	◆江戸時代から明治時代にかけての様々な変化は、何がきっかけ、理由、原因となって起こったものか確認する。	・幕末から明治維新につながる世の中の動きや明治政府が進めた国づくりについてまとめている。 【思】（記述・発言・観察）

(4) 本時の目標

日米和親条約締結の経緯や条約内容を調べる活動を通して、黒船来航時の様子や江戸幕府の対応などを新たな視点で捉えたり、条約締結について文章に表したりすることができる。 【思】(記述・発言)

(5) 本時の学習

学習活動	
○主な発問 ・予想される児童の発言・思考	・教師の働きかけ ◎評価 校内研究との関わり
1 前時の学習を振り返る。 - 江戸時代から明治時代にかけて、人々の生活や世の中の様子は大きく変化していた。 - 日本は鎖国体制をとっていたのに、なぜか清(中国)やオランダ以外の国とも交流していた。 2 黒船来航について確認する。 1853年にアメリカから4隻の船が来航した。(黒船・ペリー来航) - 江戸幕府(日本)に対して、難破した船員の救助、燃料や食料を分け与えること、貿易を行うことを要求していた。 3 学習課題を確認する。	単元を通して児童の問いが解決される学習展開 - 前時の学習をスライドにまとめ、提示しながら、児童が考えた問いを振り返る。 - 黒船が来航した際の様子、司令官であったM・ペリーを資料で示す。 - アメリカ側の要求(人命救助、薪水給与、通商の主に3つ)をおさえる。
江戸幕府は、アメリカの要求に対して、どのように対応したのだろうか。	
4 条約締結までの経緯を調べる。 ○教科書からどのような対応、経緯が調べられましたか。 - 当時の藩の半数以上がアメリカの要求に対して反対、消極的な姿勢を示していた。 - 外国船からの砲撃があったり、条約交渉の際にペリーから圧力があつたりした。 - アメリカの強い態度におされた江戸幕府は、翌年の1854年に日米和親条約を結んだ。 5 他の教科書の内容と比較する。 ○共通点は何でしょう。また、それぞれの関係性、印章はどのように感じますか。 - 共通していることは、アメリカ(ペリー)が優位に立って交渉が進められたり、条約が結ばれたりしていることだ。 - アメリカ(ペリー)は立場が強い、威圧的、武力も辞さない、日本(幕府)は立場が弱い、言いなり、	- 教科書から調べさせる。 - 視聴覚教材で条約締結までの経緯を確認する。(NHK for School「ペリー来航と開国」) - アメリカの要求に対して東北地方の藩(弘前藩、盛岡藩、仙台藩)も同様の考えであったことにふれる。 - 他の教科書の文章と児童が調べた内容を比較させる。 - 条約締結から見える関係性や、それぞれの印象について問う。

強く対応できなかったという印象を受ける。 6 配付資料から条約締結の様子を捉え直す。 ○教科書の情報と資料から読み取れた情報を比べて、どのようなことが分かりましたか。 ・当時の幕府は黒船来航の情報を事前に知っていたので、一般の人々ほど混乱しているわけではなかった。 ・艦隊からの砲撃はあったが、時間を知らせるもの、ペリーが上陸へ向けて出発する合図であり、威嚇目的ではなかった。 ・ペリー（アメリカ）にも国書を江戸まで直接届けたといった譲れない点があったが、日本にも配慮した部分があり、決して高圧的に交渉に臨んだわけではなかった。 ・アメリカからの要求に対して幕府は粘り強く、時に強硬に交渉に臨んでおり、条約は強い態度におされて結んだわけでも、不平等な内容でもなかった。	資料から読み取った情報を多角的に考察する活動 ・配付資料（「ペリー艦隊日本遠征記 上・下」「増補新版 現代語訳 墨夷応接録・英国策論 一幕末・維新の一級資料」を一部抜粋したもの、児童向けに簡易版にしたもの）から、 ・読み取れた情報や、そこから考えられる歴史的事象の捉えの違いを、ペアやグループで話合わせる。 ◎提示資料から黒船来航時の様子、幕府の対応などについて、新たな視点で情報を読み取っている。 【思】（記述・発言）
7 学習をまとめる。 ○今日の学習、資料を読み取って考えたことをまとめましょう。	・書き出しは揃えるが、続きは児童の言葉でまとめさせる。 ・本時の学習内容との相違を明確にするために、教科書から読み取れる情報でのまとめ例を提示し、児童と確認してからまとめさせる。 ◎学習内容をもとに、自分の考えもふまえて、条約締結までの経緯を文章に表している。 【思】（記述・発言）
まとめ （書き出し）江戸幕府は、アメリカと日米和親条約を結んだ。私は、 （児童の記入例）日本はアメリカの要求に対して粘り強く交渉を重ね、貿易を希望するアメリカの要求は最後まで断っているの、強い態度におされて条約を結んだわけではないと考えた。	
8 本時の振り返りを行う。	

参考・引用文献

- ・青森県史編さん通史部会「青森県史通史編2 近世」2018 青森県
- ・オフィス宮崎訳、藤本敏雄「ペリー艦隊日本遠征記 上・下」2009 万力舎
- ・アーネスト・サトウ著、森田健司訳、福田隆雄「増補新版 現代語訳 墨夷応接録・英国策論 一幕末・維新の一級資料」2023 作品社
- ・東京帝国大学「大日本古文書 幕末外国関係文書 附録之一」1913 東京帝国大学文科大学資料編纂掛